

学術集会報告

後援 埼玉医科大学 医学部 卒後教育委員会

企画 医学部 教養教育（英語）

令和6年6月10日 於 埼玉医科大学 毛呂山キャンパス

カタロスタワー7階（コンシリウムホール）

医学英語のアウトカム基盤型教育

押味 貴之

（国際医療福祉大学 医学部医学教育統括センター）

令和6年6月10日（月）、卒後教育委員会後援のもと国際医療福祉大学の押味貴之先生をお招きし、『医学英語のアウトカム基盤型教育』と題した講演及び医学部生を対象とした「医療面接」の模擬授業からなる学術集会を開催した。学術集会参加者は教員28名（教養教育・基礎医学及び各種教育関連センター教職員21名と大学院教育を含む医師7名）及び医学部生28名の合計56名であった。第1部講演の部と第2部模擬授業に分けて報告する。

第1部は教養教育の種田佳紀准教授の司会のもと、まず卒後教育委員会の三村俊英委員長による開催趣旨についての説明がなされた後、教養教育の藤森千尋より医学部の英語教育の現状についての報告がなされた。

医学部の英語カリキュラムは「縦と横の連携」を基本概念に、ここ10年で現在のような形に整備された。このカリキュラムは、英語科目と医学系専門科目の「人の連携」と「内容の連携」、また英語学習における「知識・技能の連携」をもとに開発された各種プログラムによって1年から4年まで構成されているESP（English for Specific Purposes, 特定目的の英語）カリキュラムとなっている。このカリキュラム開発に関する基本的概念の説明の後、縦と横に連携されたカリキュラム構成について具体的に報告され、到達目標や各学年のマイルストーンと各授業プログラムとの対応関係について示された。また、本学独自に編集した医学英語テキストや医学英単語集が紹介された。更に、カリキュラム評価の試み（間接的評価として学生のアンケート調査、直接的評価としてTOEFLスコア）のデータが示された後、本学カリキュラムと国際医療福祉大学の英語授業コマ数を比較したデータ（2022年度の時点で、埼玉医大145コマ、国際医療福祉大学720コマ）が提示された。それらのデータ分析から、正課における英語学習時間の量的補完と多様なニーズへの対応を目的として開発されたオンラインプログラムが紹介され、今後の検討課題の提示と幅広く学内に

協力を求める言葉で締めくくられた。

押味先生による「医学英語のアウトカム基盤型教育」と題した特別講演では、「英語で医学を学ぶ」を掲げて2017年に創設された国際医療福祉大学医学部の英語教育についてのお話がなされた。国際医療福祉大学では、医学英語教育のアウトカムとして、「医師としてのコミュニケーションを英語で実行できる」ことを掲げている。医師に必要なコミュニケーションには「医師と患者のコミュニケーション」と「医師と医師のコミュニケーション」があり、それぞれに必要な医学的知識・技能についてwhat（どのような内容）をwho（誰）が、how（どのようなカリキュラム）で教えるかについてお話がなされた。

まず、内容に関しては、「医師と患者」のコミュニケーションには「医療面接」「身体診察」「患者教育」「医学英語<一般用語>」が必要で、「医師と医師」には「症例報告」「論文読解・執筆」「口頭発表」「一般用語<医学用語>」が必要であるとの説明がなされた。誰が教えるかに関しては、国際医療福祉大学には3名の英語教員（1名の日本人と2名の外国人）と5名の医学教員（1名の日本人と4名の外国人）がおり、カリキュラムに関しては、英語教員が一般英語教育、医学教員が医学英語教育を担っている。

一般英語教育は「医師に必要な国際教養を学びながら英語だけの授業に慣れることを目的」とした1Aが60時間、「医学を英語で学ぶための英語力を身につけることを目的」とした1Bが30時間、英語Ⅱは30時間、英語Ⅲが30時間である。これら必修の他に自由選択の「英語コミュニケーション」が180時間あり、留学生（20名程度）以外ほぼ全員（100名程度）が受講している。学習成果としてTOEFLスコアの学年平均が示され、ピークの2年終了時のスコアがここ数年で伸びていることが示された。

医学教員による医学英語教育については、「医学教育モデル・コア・カリキュラムの37の症状に関して3つの医学

英語コミュニケーションを実行することができる」をアウトカムとしており、その3つとは History Taking, Case Presentation, Patient Notes である。各症状に関して、授業フォーマットに則って授業が展開しており、今回は Abdominal Pain Associated Symptoms を例に取り、身体診察やカルテ記載に必要なキーワードを提示した授業スライドが紹介された。

英語で医学を学ぶ際に必要な心構えの ABC (Be Active! Be Brave! Be Curious!) が、学内で共有され、医学英語学習についての多様な情報提供 (オンライン医学英語教育リソースの紹介など) がなされている。「医学で英語を学ぶ医学部」の実践の全体像について大変具体的で分かり易く、教員にも学生にも多くの刺激を与えてくれるご講演であった。

質疑応答では「1年次から医療面接が可能か」、「臨床現場に出た時に、習ってきたことと現実とのギャップに学生

が不満を感じないか」などの質問があり活発なやり取りが行われた。締めくくりに森茂久医学部長から本学術集会の意義についてのまとめのお話があり、感謝状が贈呈されて第1部が終了した。

第2部は「英語での医療面接を体験しよう!」とのテーマで4名一組のグループに机が配置され、7グループの間を押味先生がまわる形式で模擬授業が行われた。医療面接に必要なキーワードがスライドに映し出され、押味先生が患者の症状を提示しながら、次にどのような質問をするかを学生に尋ねるといった臨床推論形式での授業が展開した。学生から答えが出ないときはグループワークを促して巧みに学生から言葉を引き出していた。学生は意欲的に参加しており、予定より時間が延長したが13~14名の教員が最後まで参観した。

(文責：藤森千尋)